

「江戸近郊における鷹狩り」



北条氏康、むさし野小鷹狩 「江戸名所図会」より

江戸時代、程久保村には御巢鷹山があり、村人はその番を勤めていたと伝えられています。また多摩川以北は、徳川御三家の一つ尾張徳川家の鷹場で、それに隣接する市域の村々も同様の負担を受けることがありました。

江戸近郊に設けられた将軍家や御三家の鷹場や鷹狩りは、どのような制度や意味を持っていたのでしょうか。また市域の村々はどのような役目を課せられたのでしょうか。

- 日 時 3月28日（土）午後1時30分から3時30分
- 会 場 郷土資料館 講座室
- 講 師 村上 直氏 法政大学名誉教授
- 定 員 30人
- 申 込 電話にて郷土資料館へ、042-592-0981

オオタカ

森林内やその周辺の開けた農耕地で野鳥などを餌としている猛禽類。狩りの名手で昔から鷹狩りに用いられてきた。猛禽類では中型であり、名前の由来は見た目が「あお」色を帯びることから「あお鷹」が転じたとの説もある。意外に人間の生活圏に近い山ろく・丘陵地などを生息地とすることから、ゴルフ場や住宅地の開発などですまいを奪われることも多く、保護の必要性が叫ばれている。

